〈教育と社会〉研究　第24号　2014年

書評：長谷川裕編『格差社会における家族の生活・子育て・教育と新たな困難 ―低所得者集住地域の実態調査から―』

東京慈恵会医科大学非常勤講師　蓑　輪　明　子

本書は、地方都市（B市）にある団地（A団地）に住む人々の生活、子育て、教育の実態と性格について、2011～2012年にかけて行った調査にもとづき、全体像を明らかにしたものである。A団地は生活保護世帯をはじめとする生活困難層の集住する公営住宅であるが、生活困難層の生活、子育て、教育の現代的あり方を浮かび上がらせようという意図で調査が行われ、そのとりまとめとして本書が執筆されている。この本は久冨善之編著『豊かさの底辺に生きる』（青木書店、1993年10月）で報告された調査の後継調査として行われており、本書は『豊かさの底辺に生きる』で把握された世界との対比で、現代の生活困難層の世界を捉えようとする試みでもある。

1．本書が課題としたこと

二つの調査の最大の違いは、生活困難層が置かれた時代状況と社会構造の違いである。1993年の『豊かさの底辺に生きる』で描かれていたのは、企業社会化を伴って実現した戦後日本の豊かな社会の中で成立した生涯にわたる熾烈な競争の中に、A団地に住む生活困難層がくみこまれていたことであった。生活困難層の子どもを育てていこうとする努力が結果的に教育における競争秩序へと接合し、皮肉にも競争秩序の「不公正」をむしろ「公正」にするメカニズムを果たしていたことが明らかにされた。

他方、本書で聞き取りを行った現代は格差社会、貧困化社会であり、戦後社会のようには競争意識が成員全体をつかんでいるとは言いがたい社会となっている。そうした中で生活困難層の生活、子育て、教育の実態と意識の現状を探るのが本書の課題となっている。また、『豊かさの底辺に生きる』の際には必ずしも詳細に検討されていなかった、コミュニティや住民たちの子育てネットワークのあり方や第二世代の「自立」等を調べるために、本書では『豊かさの底辺に生きる』調査の読み直しも含めた作業を行っており、本書は現代の社会像を新たに明らかにするだけでなく、企業社会の時代の社会像を今の地点から改めて捉え直す著作ともなっている。

2．本書の構成と内容

本書は五章構成である。Ⅰは本書の研究史上の位置、調査概要、ⅡはA団地住民の生活実態、Ⅲはコミュニティ、人的関係、家族関係の現状や住民のそれらとのつながり方について、Ⅳは住民と学校・教師の教育意識と実態、Ⅴは全体の総括が述べられている。

「Ⅰ ＜格差・貧困と教育＞の現状と研究動向、および本研究のテーマと方法」では、格差・貧困と教育に関する現状、研究動向に関して子どもの貧困と教育の関わりに焦点をあてて紹介した上で、本書の課題を設定している。第１節では子どもの貧困が拡大する一方、子どもの貧困に対して公的財政措置が立ち遅れている現状や低所得層が学力やライフコース上の困難を抱えていること、彼・彼女らと学校文化との間に乖離が存在していること等が指摘された上で、格差・貧困の是正に対して学校ができることを考える上で、考察すべき諸論点が提示されている。子どもの貧困、格差・不平等の解決に向けたとりくみを教育という営みにだけゆだねず、教育に限らない幅広い横断的なものとすることが重要であると強調され、その際には「現在の生活困難層の「新たな困難」の性格と要因に関するより精確かつ深い分析」が不可避であり、本書がその分析の一端であるという位置づけを行っている。第２節では、本書の課題、調査

概要と特徴が述べられている。

「Ⅱ A団地の地域特性と住民の生活実態の概要」では、調査対象となったA団地の地域特性と住民の生活実態が明らかとなる。1節ではA団地の概要が述べられる。A団地は現在、高齢化が進んでおり、子育ての町としてのかつての姿が光景に退いていることが指摘される。生活保護世帯の割合増加など貧困化も進んでいるが、A団地が低家賃の公営住宅であることから、転入希望、定着傾向も高まっており、生活困難層にとってのA団地機能の変化―「スプリングボード」から「セーフティネット」へ―が示唆される。第2節では、A団地の生活困難層の中で、ワーキングプアが一定、存在することが指摘されている。ワーキングプア世帯、経済的不安定世帯（生活最低費を上回っているが必ずしも所得が高くない世帯）、生活保護世帯等の生活困難世帯が調査対象世帯の約7割を占めていること、安定層とはいえ所得は全国平均に比べ低いこと、ワーキングプア世帯は全国平均よりもやや高い約3割であることが示される。生活困難世帯には母子家庭も多いほか、非正規雇用、非熟練職種が多く、それら世帯を中心に子どもの進学をめぐる困難や悩みを抱えていることが指摘されている。

「Ⅲ A団地におけるコミュニティ・ネットワークの性格とその変容」では、コミュニティのあり方、住民たちの社会関係、社会的資源、ネットワークのあり方とその変化が析出されている。A団地では自治会等のコミュニティが脆弱化しているが、子育て世代は個別的なつながりを作りつつある。ただし、コミュニティや個別的つながりよりも親族のネットワークへの依存が強まっており、公営住宅を基盤に、団地で社会的資源と関係を活用することで生活困難を乗り切る戦略が生み出されつつあるという。

1節では『豊かさの底辺に生きる』調査時に比して、A団地のコミュニティの機能が低下して生活の個人化が進み、社会関係資本の全般的弱体化、親族への依存が強まっていることが明らかとなる。2～4節では団地住民の第二世代の状況を扱い、低家賃の団地を基盤とした親族ネットワークが第二世代のセーフティネットになっていることが指摘されている。2節では、第二世代が仕事の不安定さ、失業、障害、離婚といった出来事に対して、団地での親世代との同居をすることによって対応している現状が明らかとなっている。3節では、第二世代の進学、就業といったライフイベントへの対応が、親世代の世帯のあり方によって異なることを明らかにしている。例えば、いずれの世帯も高卒が大半を占め、進学をあきらめる子どももいる一方、母子・傷病・引揚世帯で短大卒以上の高学歴が見られるという。いずれの世帯も家族でのがんばりによって高卒を達成しているが、母子世帯等では子どものアルバイトなどで進学への準備を系統的に行って高学歴を実現しているという。全体としては、第二世代が直面する問題の解決が家族内に囲い込まれ、支援のしにくさ、困難の再生産が生じる構造があると指摘する。4節では、団地に居住する第二世代の団地居住の経緯（学卒後もずっと住んでいるのか、一度別居した後、戻っているのか、そのきっかけ等）が検討され、団地居住している人はそうしなければ暮らしていけない人々が集中していることが指摘されている。

5節では、子育て世代では、近所付き合いを否定する人と肯定する人が拮抗しているが、全体として付き合いの凝集性が低下している実態が示されている。その中でもママ友のネットワークなどを自分たちで調達するつながりを得ているとはいえ、物質的サポートについては親族に傾斜していることが指摘されている。6節では、団地住民の団地暮らしに対する意味づけを明らかにした上で、意味づけが肯定的なものであるか否定的なものであるかは、社会関係資本の活用の度合いによって異なっていることを指摘している。「団地暮らし」を肯定する人ほど社会関係資本の活用の程度が高い結果が得られており、これは住民が「団地暮らし」を標準的な家族形成の足がかり（ほかの賃貸住宅や持ち家などへのステップ）として考えるのか、標準にとらわれずに自分たちが生きぬくためのサバイバル戦略として捉えるかの違いに起因するという。

「Ⅳ A団地における子育て・教育とそれをめぐる意識」では、住民の子育てや教育の実態、学校の教師の地域や子どもたちの捉え方、地域の幼稚園の実態を検討している。A団地の親たちは子

育て、教育に熱心でありながら、子どもの自主性を尊重する志向を強め、学校へも個別の対応を求める傾向が強まっていることが明らかとなる一方、教師は子どもと親の状況に即した教育課題が設定しきれていないことが指摘されている。

１節では、Ａ団地住民の子育てへの意識が全般的に熱心であり、両親世帯では生活上の習慣のほか、親が勉強を教えるなど学校中心に考えられ、ひとり親世帯では生活習慣や生活能力を身につけるなど生活中心に構想される傾向のあることが指摘される。２節では子どもの将来に対する保護者の期待について、子どもの自主性を尊重する感覚が広がる一方で、学歴の最低ラインを高卒とする人が増えていることが明らかにされた。３節では、親から見た子どもの教師、学校体験が検討され、母子世帯の子どもに否定的な経験がより集中する傾向が示された。他方、母子世帯で学校、教師体験を肯定する人が多く、両親世帯で否定する人が多いという。

３、４節は教育機関の子ども、教育認識を検討している。４節では、この地域の学校教師たちの子どもたちの状況、教育課題の認識が検討されている。教師たちはＡ地区と子どもたちについて、家庭の教育力不足、親の教育への関心の低さ、経済的困難、基本的生活習慣や学力不足等の困難を抱える一方、性質は素朴で素直だと認識しているが、こうした認識は子どもたちや親たちの現状をよく理解している面としていない面があり、現状にかみ合っていないという。こうした教師たちの認識のちぐはぐさ（「認識のグラデーション」）は、貧困層を不利な立場であり包摂されるべき存在だと認識すると同時に、自分たちとは断絶した異なった存在だと認識する「リベラルな他者化」と言える現象であり、『豊かさの底辺に生きる』調査時に指摘された教師による生活困難層への見下しと通底する性格があるという。５節では、Ａ地区の幼稚園の子育て支援を検討している。この地区の幼稚園の園児は母親がフルタイムで働く必要のない家庭を前提に運営されており、そうした家庭と教職員による子育て共同体が形成されているが、この共同体とＡ団地住民は重複しておらず、地域での子育ての階層化が進んでいる可能性が示唆されている。

「Ｖ　総括」では、本書で明らかになった状況に関して、『豊かさの底辺に生きる』との対比の中で、Ａ団地の現状を理解するための枠組みが提案されている。第一に指摘されているのは、Ａ団地の住民は一見、競争へのコミットメントを弱めているように見えながら、競争の構造の中に組み込まれている点である。競争は本来、それを拒否する人の存在も含めて構造化されているのであり、Ａ団地の住民たちも構造的な競争の中に今なお組み込まれている。第二に、にも関わらず、Ａ団地の住民の生活文化が「私生活主義」から「貧困の文化」へという型へと変化したと指摘されている。『豊かさの底辺に生きる』の時代には、Ａ団地の生活困難層が限られた人間関係と消費水準の向上に重きをおき職業もそのための手段にすぎないとする「私生活主義型」文化を形作っていたのに対し、今回の調査では、現在の刹那的な喜びを他者との相互作用に見いだし、相互扶助で暮らしを成り立たせようとする「貧困の文化」を形成していると特徴づけている。社会移動の可能性を提示することを基軸に成立した社会が縮小する中で、新しい時代を乗り切るものとして生活困難を抱えた層に新たな生活様式が生み出されつつあるのではないかということが指摘されている。

3. 本書の意義と論点

以上のような現状把握は、格差社会の「底辺」を余儀なくされる人々が一方的に底辺に位置づけられる存在と見るのではなく、彼・彼女らなりにさまざまな社会的資源を活用しながら、したたかに生きぬいている姿を具体的に浮かび上がらせるものである。しかも、その生き方は進学をめぐる問題や生活の余裕のなさ、学力等の面で多くの困難をはらみつつも、格差社会をぎりぎりのセンで生きぬく、ある種の文化、標準を形作っている営みに焦点を当てるもので、格差社会の新しい側面に光を当てた著作として、本書は多くの人に読まれ検討されるべき労作である。

私にとって印象的であったのは、本書の方法についてである。高齢化、コミュニティの崩壊、家族ネットワークへの依存、教育における競争の弛緩、若年層の生活困難等がＡ団地の実情に即して

より実証的に検討されており、実証の方法も含めて非常に勉強になった。また、一人一人の客観的状況とそれぞれが持つ意識・認識を関連づけて、生活困難層の生きぬき方の萌芽を析出していく方法や人間関係を丁寧に検証する方法は、社会学的な方法の強みが活かされており、本書が生活困難層の「サバイバルを重視した戦略」や「貧困の文化」を析出するための有効な方法となっているように思われる。

さらに、私が最も感心したのは、生活困難層の生活や人間関係が、教育制度や社会保障制度など、公的に準備される諸制度に基礎づけられるという視点が本書全体に貫かれていることである。人々の暮らしが「私的に」アクセス可能な諸資源によって成り立つ側面だけでなく、(「私的に」アクセスできる資源も含めて) 公的に準備される諸制度に支えられていることに着目して生活構造を記述することは案外、むずかしいように思うが、本書ではその困難が一定、克服されている。本書の調査対象が公営団地に住む生活困難層に設定されているために公的に準備される社会的資源の位置づけを考察し続けることが課題となったという事情があるにしても、執筆者においても生活困難層の生活構造へのリアリティが社会観のレベルで共有されていたのではないだろうか。本書では、A団地の住民は様々な困難を抱えているものの、社会一般の格差社会化に伴って、公営団地の世界が底辺の位置を脱し、よりましなものとなる、いわば逆転現象が生じていることがいろいろな形で指摘されているように思うが、そうしたことが把握できるのも、公的制度によって支えられる生活困難層の生活構造へのリアルな認識が共有されているゆえであろう。

こうした本書のメリットを踏まえた上で、三つの論点を本書に投げかけたく思う。第一に、2000年代の社会保障をめぐる状況変化はA団地の生活困難層の生活構造に影響を与えていないのかという問題である。本書では生活保護をはじめとする社会保障制度や学校教育制度の不足が想定されているものの、必ずしもそれらが動的なものとして立ち入って分析されているわけではない。本調査が対象とするA団地の生活困難層の生活を支えているのは低廉な住宅もさることながら、そもそもは生活保護制度や義務教育制度であろう。本調査が行われた2010年前後は格差社会の問題と社会保障への関心が最も高まった時期であり、『豊かさの底辺に生きる』時期の生活保護の切り捨てとは逆のベクトルも働いている。この流れが「貧困の文化」「サバイバル戦略」の登場に影響を与えていなかったのか、今回の調査の事例の歴史的射程を考える上では検討が必要なように思われる。

第二は現状に対する教育が果たしている役割の評価についてである。本書では、生活困難層の子どもたちが成長するにあたって学校教育や教師たちが果たしている役割の評価が執筆者によってかなり異なっているように思われた。例えば、V—3では子どもたちの否定的な学校経験に対する教師の個別的対応が十分でないにせよそれなりに行われていると評価する一方、V—4では教師の子ども認識が「リベラルな他者化」として特徴付けられ、批判的に捉えられている。生活困難層の子どもたちに教育としては今、最低限、何を行う必要があるのか、不十分だとするといかなる点かをより立ち入って分析し、現状を評価していく必要があるように思われた。

第三は、企業社会の時代におけるA団地のコミュニティが結局のところ何によって支えられていたのかという問題である。本書では企業社会の時代とは異なり、コミュニティが衰退したことが証明されているが、ひるがえって、企業社会の時代に形成されていたコミュニティを支えた構造については分析されていない。本書では格差社会化の中での就労の必要がコミュニティを阻害していることが一応、前提されているようであるが、そうした構造は企業社会の時代にも指摘されていた点であり、コミュニティ形成という視点から見た企業社会の時代の社会構造の見直しが必要ではないだろうか。

(本書は旬報社から2014年に刊行された)